

彥簋銘文小考

古木 誠彦

九州女子大学人間科学部人間基礎学専攻 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2022年10月28日受付、2022年12月13日受理)

要 旨

本論は、現在、金文関連の書籍等に全く掲載のない彥簋について、『商周青銅器銘文暨圖像集成』(呉鎮烽編著)を基礎資料としてその概要をある程度明確にしながら、銘文中の「童」字について検証を行った。

この「童」字については、『説文解字』にある「動」字と同字義・同用法であると仮定し、その字形構成に特殊性を見出しながら試論を行った。

その結果、彥簋銘文中の「童」(動)字は、「作す」という字義で使用され、しかも青銅器銘文中では初見の事例として結論付けた。

後漢時代以降の石碑や簡牘などでは事例をよく見るが、西周時代金文において、「童」(動)字の事例が少ない中、この研究は大きな意義をもつと考える。

緒 言

本論で取り上げる彥簋は、個人所蔵のものであり、現在『商周青銅器銘文暨圖像集成』¹(以下、『暨圖像集成』と略す)以外の青銅器関連の書籍等には全く掲載の無い青銅器である。それ故、本青銅器自体の真偽は不明確ではあるが、字形・銘文内容・器型などを基に『暨圖像集成』では、彥簋を西周時代中期のものと比定している。しかし、その論拠は明確ではない。また、銘文を見ると字間が整齊(西周時代中期の特徴)ではあるが、縦長の字形に肥筆と文末の図象が看取できる。これらは西周時代前期の特徴でもある。

よって本論では、西周時代中期と時代設定をしたその論拠を検証しながら、彥簋の字形の特徴について究明したい。

この彥簋に関する基本的事項を『暨圖像集成』に拠り、先ず確認すると以下になる²。

<時 代>西周時代中期。

<収蔵場所>某収蔵家。

<出土時地>2011年9月見於北京。

<尺 度>未報告。

<形制紋飾>弁口鼓腹、一對獸首耳、下有長垂珥、矮圈足下連鑄三條小柱足。通體飾瓦溝紋。

<著 録>未掲載。

<銘文字数>内底刻銘文22文字(重文1)。

<銘 文>彥作文考父丁寶尊簋、其子子孫萬年永寶童宮簋。戩亞。

前記のように『暨圖像集成』では出土時地が不明である。しかしながら、器型と瓦溝紋による類似型を調査研究し、その検証で出土地に関する何らかの手掛かりが顕出できないかと考える。この調査研究に関しても、『暨圖像集成』を基本資料として進める。

1 呉鎮烽編著『商周青銅器銘文暨圖像集成』上海古籍出版社(2012, 9)。彥簋の器影、銘文写真ともに初出。

2 同『商周青銅器銘文暨圖像集成』286-287頁。内容として青銅器に関する極簡単な基本的事項と青銅器画像、銘文画像の他には何も記載されていない。

珍簋の器型式と紋様

『暨圖像集成』掲載の器影(図1)から、珍簋における形制紋飾の特徴を端的に述べると、「器腹全面の瓦溝紋」、「一对の耳下の長垂珥」、「圈足下の三條小柱足」と言える。そこで、この特徴と同じまたは類似する簋器の有無について、『暨圖像集成』で確認を行った(表1)。

先ず珍簋の特徴で顕著な紋様に着目し、瓦紋(凹形の溝が上から少し覆うように並行する紋)・瓦溝紋(凹形の溝が並行する紋)・瓦楞紋(凹形の溝の際が角張っている紋)・瓦稜紋(凹形の溝の際が尖った形状の紋)などと報告される52器を確認した。ここにおける四種類の瓦紋は、詳しく表記をすることでより実写に近い紋様の形状を表わそうとしたものであると解釈できる。よって、この四種は大まかには「瓦紋」と、ひと括りにしても差し支えないと考える。

珍簋の紋様は瓦溝紋と報告されている。この52器中、瓦溝紋と報告されているものは19器確認できた。さらに19器の時代比定は、西周時代中期が10器、西周時代後期が8器、春秋時代が1器であった。

簋器の紋飾においては、西周時代前期から瓦紋と他紋様とを組み合わせたものも存在するが、「器腹全面の瓦紋」の大半が西周時代中期から作られ、以後、春秋時代まで続くことが、この(表1)より確認できる³。

さらに珍簋は、彭裕商氏の器型分類に関する研究方法⁴を援用し、その特徴を明確にすると、「腹部垂鼓、圈足較矮、外撇、器体較矮、紋飾為全瓦溝紋」であり、Ea III式簋ということになる。ただ珍簋は圈足下に三條小柱足があるためEa V式簋とも類似する。彭裕商氏はEa III式簋について、上限を昭王期、下限は恭王期と結論付けている。またEa V式簋については、主に瓦紋とそれ以外の紋飾の関係と圈足下に三條の柱足を付す特徴から、西周時代後期ののものであると比定している。

この珍簋は、Ea V式簋の特徴のひとつである圈足の下に三條柱足が見られるため、Ea III式・Ea V式の両特徴を持ち、西周時代中期と比定されるが、後期へと繋がる変化が見られるため、「簋器に関しては今までにない価値観」が生じる中で創られた器と想定できないだろうか。

(図1)



3 張長寿・陳公柔・王世民著『西周青銅器分期断代研究』文物出版社(1999, 11) 261頁-262頁。

4 彭裕商著『西周青銅器年代綜合研究』巴蜀書社出版(2003, 2) 簋に関する分類は125頁から175頁に記載。その中で、型式の代表とする器名を挙げ、系統立てて論じられている。Ea III式簋については、賢簋(本論:表1「商周青銅器銘文暨圖像集成No.5070」)、斨簋(本論:表1「商周青銅器銘文暨圖像集成No.5083」)、<友+甘>簋(本論:表1「商周青銅器銘文暨圖像集成No.4115」)、伯姬簋(本論:表1「商周青銅器銘文暨圖像集成No.4130」)、伯簋(本論:表1「商周青銅器銘文暨圖像集成No.4545」)を挙げ、これらは銘文字体から西周時代中期に属すと結論付けられている。

(表1)

商周青銅器銘文彙圖像集成 (NO.)	器名	時代	銘文	器の特長	出土地	收藏場所
3727	口它簋	西周中期前段	口它	斂口、垂腹、蓋面隆起、上有圈狀捉手、矮圈足下連鑄三個小支足。通體飾瓦溝紋。	2005年山西省絳縣橫水鎮西周墓(M2. 62)	山西省考古研究所
3804	弔父丁簋	西周中期	叔父丁	斂口、鼓腹、一對獸首耳、下有長方形垂珮、圈足沿外侈、連鑄四條小柱足、蓋面隆起、上有圈形捉手。通體飾瓦紋。		劉體智
3805	弔父丁簋	西周中期	同上	同上		瑞士蘇黎世烈堡博物館
3908	作寶簋	西周中期	作寶簋	斂口鼓腹、一對獸首耳、耳圈較細、下有垂珮、圈足外侈。體飾瓦溝紋。		瑞典斯德哥爾摩：韋森
4075	呂姜簋	西周早期	呂姜作簋	斂口鼓腹、口沿下有一對銜環獸首耳、圈足連鑄三條高足。腹飾瓦紋、三足與圈足交接處飾牛首紋。	1972年甘肅省靈臺縣獨店公社吊街大隊西嶺西周墓葬(M1. 3)	甘肅省博物館
4115	(友+日)簋	西周中期前段	(友+日)作旅彝	失蓋。斂口鼓腹、矮圈足、一對獸首耳、下有長方形垂珮。通體飾瓦溝紋。		錢天樹、張延濟
4130	伯姬簋	西周中期	伯姬作支	斂口鼓腹、一對獸首耳、下有長方形垂珮、圈足沿外侈。體飾瓦紋。		上海博物館
4182	(門+豕+支)伯簋	西周早期後段	(門+豕+支)伯作旅簋	子口較高、失蓋、下腹向外傾垂、圈足沿外侈、一對附耳、通體飾瓦紋。	1980年陝西省扶風縣上宋鄉北呂村(M148. 3)	扶風縣博物館
4252	秦公簋	春秋早期	秦公作寶簋	斂口鼓腹、一對龍首耳、無垂珮、矮圈足下連鑄三條獸面扁足、覆鉢形蓋、上有圈狀捉手。通體飾瓦溝紋。	傳：甘肅省禮縣大堡子	

4444	孟得簋	西周中期	孟得作寶簋、永用	斝口、下腹向外傾垂、矮圈足外撇、隆起的蓋上有圈狀捉手、下有子口、嵌入器口、獸首雙耳、有方垂珥。通體飾瓦紋。	1984—1989年山西省曲沃縣天馬曲村西周墓葬(M7070. 1)	北京大學考古文博學院
4545	伯簋 (伯作寶簋)	西周中期	伯作寶簋、子子孫孫永寶用	斝口鼓腹、一對獸首耳、下有方形垂珥、圈足沿外侈。體飾瓦紋。		劉體智
4652	散伯簋甲	西周晚期	散伯作女姬寶簋、其萬年永用	斝口鼓腹、一對獸首銜環耳、圈足外撇、下有三個獸面扁足、隆起的蓋上有侈口圈狀捉手。通體飾瓦溝紋、圈足飾兩道弦紋。		美國哈佛大學福格美術博物館
4653	散伯簋乙	西周晚期	同上	同上	1982年6月出現在英國倫敦佳士得拍賣行	美國紐約大都會美術博物館
4654	散伯簋丙	西周晚期	同上	同上		美國哈佛大學福格美術博物館
4655	散伯簋丁	西周晚期	同上	同上	傳：光緒中陝西省鳳翔縣出土	上海博物館
4663	叔(非+升)簋甲	西周中期前段	叔(非+升)作寶簋、其萬年孫子永寶	斝口鼓腹、蓋面隆起、上有圈狀捉手、腹壁呈弧形、一對獸首耳、下有方形垂珥、矮圈足外侈。蓋面和器身均飾覆瓦形紋。		某收藏家
4664	叔(非+升)簋乙	西周中期前段	同上	同上		某收藏家
4736	晉侯簋甲	西周中期	晉侯作旅寶簋、其孫子子萬年永寶用	斝口鼓腹、上有子口、蓋面隆起、上有圈狀捉手、圈足下有一道邊圈、一對獸首耳、下有方形垂珥。通體飾瓦溝紋。		北京大學文博考古學院
4737	晉侯簋乙	西周中期	同上	同上		器：成都華通博物館 蓋：北京大學文博考古學院

4753	伯梁父簋甲	西周晚期	伯梁父作(女+龍+卪)姑尊簋、子子孫孫永寶用	斂口鼓腹、有子口、圈足外侈、圈足下連鑄三條獸面扁足、一對獸首耳、下有方形垂珥、蓋面隆起、沿下折、中央有圈狀捉手。通體飾瓦紋。	1961年10月西安市長安區馬王鎮張家坡西周銅器窖藏(11號)	陝西省歷史博物館
4754	伯梁父簋乙	西周晚期	同上	同上	1961年10月西安市長安區馬王鎮張家坡西周銅器窖藏(12號)	同上
4755	伯梁父簋丙	西周晚期	同上	同上	1961年10月西安市長安區馬王鎮張家坡西周銅器窖藏(13號)	同上
4756	伯梁父簋丁	西周晚期	同上	同上	1961年10月西安市長安區馬王鎮張家坡西周銅器窖藏(14號)	同上
4769	詒簋	西周晚期	詒作皇母尊簋、其子子孫孫萬年永寶用	子口有蓋、蓋沿下折、圈狀捉手、腹外鼓、圈足下連鑄三個獸面扁足、一對獸首耳、下有方形垂珥。通體飾瓦紋。		故宮博物院
4770	詒簋	西周晚期	同上	同上		同上
4800	叔向父簋 (叔向父爲備簋)	西周晚期	叔向父爲備寶簋兩、寶鼎二、百世孫子寶	斂口鼓腹、一對獸首銜環耳、圈足沿外侈且連鑄三條小足、蓋呈弧形面、上有圈形捉手。通體飾瓦紋。	1979年山西芮城縣柴村西周墓葬	芮城縣博物館
4802	(女+卪) 理母簋	西周晚期	(女+卪)理母作南旁寶簋、子子孫孫其永寶用	窄沿方唇、下腹收斂、圈足沿外侈、下沿有邊圈。一對獸首耳、下有垂珥。通體飾瓦紋。		原藏胡介亭、陳介祺、李璋煜、劉體智(從古憲齋、攬古錄)
4860	杞伯每刃簋	春秋早期	杞伯每刃作邾曹園簋、其萬年子子孫孫永寶用	斂口鼓腹、腹爲扁圓形、底部近平、圈足高、沿外侈。蓋面隆起、上有圈狀捉手。從蓋到圈足周身飾瓦楞紋、蓋捉手內飾蜷曲鳥紋。		某收藏家

4874	邢公簋 (井公簋)	西周晚期	井(邢)公作仲姊婁姬寶尊簋、其萬年子子孫孫永寶用。	直口鼓腹、腹部有一對獸首耳、下有垂珥、蓋面隆起、上有圈狀捉手、蓋沿下折、圈足下連鑄三個小足。蓋面及腹部均飾瓦溝紋。		某收藏家
4875	邢公簋 (井公簋)	西周晚期	井(邢)公作仲姊婁姬寶尊簋、其萬年子子孫孫永寶用。	同上	2011年11月出現在西安	某收藏家
4922	允簋	西周晚期	允作朕皇考叔氏尊簋、允其萬年子子孫孫永寶用。	斝口鼓腹、一對銜環獸首耳、圈足低矮而外侈、並連鑄三條獸面扁足。通體飾瓦紋。		台北故宮博物院
4944	吳(豕+彡) 婦父簋	西周晚期	吳(豕+彡)父作皇祖考庚孟尊簋、其萬年子子孫孫永寶用。	斝口鼓腹、子母口、獸首雙耳、下有鈎狀垂珥、圈足下有三個獸面扁足、蓋隆起、沿下折、蓋上有圈狀捉手。通體飾瓦紋。		故宮博物院
4947	陽(食+人) 生簋蓋	西周晚期	陽(食+人)生自作尊簋、用賜眉壽、萬年子々孫々永寶用享。	蓋面呈球面形、上有圈形捉手。飾瓦紋。	1977年11月湖北襄陽縣資山公社王城杜家莊	襄樊市博物館
4995	鄭號仲簋	西周晚期	佳十又一月既生霸庚戌、鄭號仲作寶簋、子々孫々(彳+及)永用。	斝口鼓腹、一對虎首耳、下有方形垂珥、圈足沿外侈、其下連鑄三條虎面彎足、蓋沿下折、蓋面隆起、上有圈狀捉手。蓋面和器腹飾瓦溝紋、圈足飾一道弦紋。		書道博物館
4996	鄭號仲簋	西周晚期	佳十又一月既生霸庚戌、鄭號仲作寶簋、子々孫々(彳+及)永用。	斝口鼓腹、一對虎首耳、下有方形垂珥、圈足沿外侈、其下連鑄三條虎面彎足、蓋沿下折、蓋面隆起、上有圈狀捉手。蓋面和器腹飾瓦溝紋、圈足飾一道弦紋。		上海博物館
5003	叔噩父簋	西周中期	蓋銘：叔噩父作婁姬旅簋、其夙夜用享孝于皇君、其萬年永寶用。 器銘：叔噩父作婁姬旅簋。	寬體斝口、鼓腹矮圈足、獸首銜環雙耳、蓋上有圈狀捉手、通體飾瓦紋。		イギリスオックスフォードアシュモリアン博物館
5015	孟姬(彡+旨) 簋	西周晚期	孟姬(彡+旨)【脂】自作饋簋、其用追孝于其辟君武公、孟姬其子孫永寶。	斝口鼓腹、兩側有一對獸首銜環耳、圈足下連鑄三個獸面小足。通體飾瓦紋。	1977年11月湖北襄陽縣資川公社王城杜家莊	襄樊市博物館

5070	賢簋	西周中期	隹九月初吉庚午、公叔初見于衛、賢從、公命使(田+每)賢百(田+每)糧、用作寶彝。	斂口鼓腹、圈足沿外侈、一對獸首耳、下有方形垂珥、蓋面隆起、上有圈狀捉手。蓋器均飾瓦紋。		上海博物館
5083	(黃+女)簋	西周中期	隹八月初吉丁亥、伯氏貯(黃+女)、賜(黃+女)弓、矢束、馬匹、貝五朋、(黃+女)用從、永揚公休。	斂口有蓋、器腹向外傾垂、甚扁、圈足外侈、體側有半環狀耳一對。此簋蓋器均飾橫向瓦稜紋。		故宮博物院
5103	邢南伯簋	西周中期	隹八月初吉壬午、邢南伯作(妻+卩)季姚好尊簋、其萬年子子孫孫永寶、日用享孝。	斂口鼓腹、一對獸首銜環耳、圈足外撇、其下連鑄三個獸面扁足。體飾瓦紋。		上海博物館
5152	蛇乎簋	西周晚期	隹正二月既死霸壬戌、蛇乎作寶簋、用聽夙夜、用享孝皇祖、文考、用勾眉壽、永命、乎其萬年永用、刺。	斂口鼓腹、一對獸首耳、下有方形垂珥、矮圈足連鑄三個獸面小足、蓋面圓鼓、上有圈形捉手。通體飾瓦紋。	1966年7月湖北省北京山縣平壩公社蘇家壩	湖北省博物館
5153	蛇乎簋	西周晚期	隹正二月既死霸壬戌、蛇乎作寶簋、用聽夙夜、用享孝皇祖、文考、用勾眉壽、永命、乎其萬年永用、刺。	斂口鼓腹、一對獸首耳、下有方形垂珥、矮圈足連鑄三個獸面小足、蓋面圓鼓、上有圈形捉手。通體飾瓦紋。	1966年7月湖北省北京山縣平壩公社蘇家壩	湖北省博物館
5180	豨簋	西周中期	唯十又二月既生霸丁亥、王使榮蔑曆、令往邦、呼賜鑿旂、用保厥邦。豨對揚王休、用自作寶器。萬年以厥孫子寶用。	斂口、鼓腹、器與蓋有子母口相合、蓋上捉手呈圈狀、器腹兩側有一對附耳、圈足較低。此簋通身飾瓦稜紋。		故宮博物院
5220	霸伯簋	西周中期	唯十又一月、邢叔來麥、迺(乃?)蔑霸伯歷(?)、使伐、用幘二百、丹二量、虎皮一。霸伯拜稽首、對揚邢叔休、用作寶簋、其萬年子子孫孫其永寶用。	體扁矮、斂口鼓腹、蓋面弧形隆起、上有圈狀捉手、捉手有對穿孔、蓋內沿有子口、腹壁呈弧形、一對獸首耳、下有方形垂珥、矮圈足外侈。蓋面和器身均飾瓦溝紋。外底有十字加強筋。	2009—2010年山西省翼城縣大河口西周墓葬(M1017.8)	山西省大河口墓地聯合考古隊
5237	適簋	西周中期前段(穆王世)	唯六月既生霸、穆穆王在口京、呼漁于大池。王饗酒、適御無譴、穆穆王親賜適爵。適拜首稽首、敢對揚穆穆王休、用作文考父乙尊彝、其孫子子永寶。	斂口鼓腹、圈足沿外侈、其下連鑄三個獸頭柱足、獸首銜環雙耳。腹飾瓦紋。	庚戌年秦中出土(小校)	台北故宮博物院
5244	無(己+其)簋	西周晚期(厲王世)	唯十又三年正月初吉壬寅、王征南夷、王賜無(己+其)馬四匹、無(己+其)拜手稽首曰：敢對揚天子魯休命。無(己+其)用作朕皇祖釐季尊簋、無(己+其)其萬年子孫永寶用。	形同詢簋、即簋、低體寬腹、斂口、矮圈足沿外撇、一對獸首銜環耳、蓋的捉手作圈狀。通體飾瓦紋、蓋的捉手內飾卷體龍和鱗紋。		上海博物館

5245	無(己+其)簋	西周晚期 (厲王世)	同上	同上		中國國家博物館
5290	即簋	西周中期 後段 (懿王世)	唯王三月初吉庚申、王在康宮、格太室、定伯入右即。王呼：命汝赤韍、朱黃、玄衣、黼純、鑿旒。曰：司瑀宮人、虺口、用事。即敢對揚天子丕顯休。用作朕文考幽叔寶簋、即萬年子子孫孫永寶用。	低體寬腹、圈足矮而外撇、斂口鼓腹、一對銜環獸頭耳。腹部飾瓦溝紋。		陝西歷史博物館
5326	豆閉簋	西周中期	唯王二月既生霸、辰在戊寅、王格于師戲太室。邢伯入右豆閉、王呼內史冊命豆閉。王曰：閉、賜汝織衣、口市、鑿旒。用抄乃祖考事、司(宀+又+止)兪邦君司馬、弓、矢。閉拜稽首、敢對揚天子丕顯休命、用作朕文考釐叔寶簋、用賜壽壽、萬年永寶用于宗室。	造型和即簋相同、斂口低體寬腹、獸首銜環耳、低圈足外侈。通體飾瓦溝紋。		故宮博物院
5371	師虎簋	西周中期 後段 (懿王世)	唯元年六月既望甲戌、王在杜(宀+立)、格于太室、邢伯入右師虎、即立中廷、北嚮、王呼內史吳曰：冊命虎、王若曰：虎、載先王既命乃祖考事、嫡官司左戲(每+系)荆、今余唯帥型先王命、命汝更乃祖考、嫡官司左右戲(每+系)荆、敬夙夜勿廢朕命、賜汝赤烏、用事。虎敢拜稽首、對揚天子丕(不+不)魯休、用作朕烈考日庚尊簋、子子孫孫其永寶用。	失蓋、體較寬、斂口鼓腹、獸首耳、矮圈足向外撇。通體飾瓦溝紋。		上海博物館
5378	詢簋	西周中期	王若曰：詢丕顯文、武、受命、則乃祖奠周邦、今余命汝適官司邑人、先虎臣後庸：西門夷、秦夷、京夷、口夷、師筭、側薪、口華夷、弁狐夷、ㄩ人、成周走亞、成、秦人、降人、服夷、賜汝玄衣黼純、緇韍、銜衡、戈瑀、厚必、彤沙、鑿旒、攸勒、用事。詢稽首、對揚天子休命、用作文祖乙伯、同姬尊簋、詢萬年子子孫孫永寶用。唯王十又七祀、王在射日宮、旦、王格、益公入右詢。	低體寬腹、矮圈足外侈、蓋上有圈狀捉手、口沿下有一對銜環獸首耳。通體飾瓦紋。	1959年6月陝西省藍田縣寺坡村西周銅器窖藏	藍田縣 文物管理委員會
5385	乖伯簋	西周中期 後段	唯九年九月甲寅、王命益公征眉敖、益公至告、二月眉敖至見、獻帛、己未、王命仲致饋乖伯狐裘。王若曰：乖伯、朕丕顯祖文、武、庸、受大命、乃祖克弼先生、翼自它邦、有口于大命、我亦弗深享邦、賜汝黼裘、裘、乖伯、拜手稽首、天子休弗忘小裔邦、歸芻敢對揚天子丕口魯休、用作朕皇考武乖幾王尊簋、用孝宗廟、享夙夕、好朋友零百諸嬖、用祈純祿、永命、魯壽子孫、歸芻其萬年、日用享于宗室。	造型與即簋相同、低體寬腹、斂口底圈足、獸首銜環耳。通體飾瓦溝紋。		中國國家博物館

銘文内容の検討

次に銘文内容（図2）を確認する⁵。『暨圖像集成』を基にすると以下のようなになる。

（図2）



彥作文考父丁寶尊簋、其子子孫萬年永寶童宮簋。馘亞。

（彥は文考父丁の寶尊簋を作る。其れ子子孫萬年永く寶とし、宮簋を童せん。）

金文研究により、銘文末に氏族図像が認められることは、その器の製作者が殷の末裔（殷系出身者）と考えられる。このことは、現在では周知のことである。よって、本器制作者（制作依頼主）の彥（人名）は殷系の人物であると確認できる。周王より褒賞され、その証として文考父丁（亡父）のための寶尊簋を作り、

5 『暨圖像集成』では銘文拓の掲載は無く、画像のみの掲載。腐食等のため字形が不鮮明な箇所が多少ある。また、『暨圖像集成』の記載には、銘文は「内底刻」とある。この時代に青銅器へ直接銘文を刻して残した例は皆無である。よって、出土当初は腐食等で文字が不鮮明であったため、現代において鑄込まれた部分をきれいに彫り直したことで、刻したような形状になっていたのではないかと想像する。

それを子々孫々永く寶として伝えていくこと、これがこの銘文内容の主である。殽という人物は、この青銅器が初出であるため、人名による青銅器等の比較検証はできない。

このように不明瞭な部分はあるが、銘文内容に関して稿者が特に注目したい点は、「童宮簋」の部分である。殽簋と同西周時代中期の青銅器銘文⁶では、「～子子孫孫萬年永寶用～」「～子子孫孫萬年永寶享～」のように、〈用〉（用いる意）、〈享〉（祀る意）という語が付されるのが通例である。つまり祭祀儀礼で用いる意味を付記している。

この「童宮簋」の「童」字を図版で確認すると、「辛」「目」「東」に従う字形である。「童」字は『説文解字』⁷に「男有皐曰奴、奴曰童、女曰妾」（男の皐あるものを奴といい、奴は童といい、女は妾という）とあり、いわゆる受刑者の意を記載している。

この殽簋銘文中で、『説文解字』中の「童」字の字義・用法を採るならば、前述のような受刑者という意では文意が通らない。このことから、この「童」字を、毛公鼎銘文の用例⁸より「動」字の初文と考えたい。

「動」字は『説文解字』⁹に「作也」（作すなり）とある。よって「童宮簋」は「宮簋と作す」と読解できよう。つまり、文意は「～子々孫々萬年永く寶とし、宮簋と作す」と解釈できる。

例えば、(表1)中の西周中期の豆閉簋 (No.5326) では銘文末尾に「～萬年永寶用于宗室」とある。ここでは、永く寶として用いる場所を表記しており、このように「～萬年永寶」の後にさらに詳細を付記することは、銘文の用法でよくある。よって、殽簋銘文中の「子孫萬年永寶童宮簋」でも同様に捉え解釈をした。

『字統』¹⁰において「動」字の解釈を「もと耕作のことをいう字であった」とするが、「童」字を「動」字の初文と考えた場合、「童」の字形から現時点でどのような根拠でこのような結論に至るのか見出せない。

殽簋銘文中の「童」字についての考察

白川静は『字統』において、「動」字を以下と解釈している。

声符は重。金文は童を動の義に用いており、動はもと童に従い、童声の字である。童の上部は辛と目に従う形で、目の上に入墨を加えた奴隸、下部は東（囊）の形と、それに錘として土を加えた形で、その部分が声。童はすなわち僮、力は耒の形。僮僕が耒をもって農耕に従うことを動という。

受刑者の意である「童」、それを労役として「耒」を持たせることで、このような解釈ができるであろう。

本器と同じ西周時代中期に比定されている史牆盤銘文には、「微伐夷童」と記載されている。この「夷童」は商の紂王の賤称と考えられ¹¹、「童」字は即ち「僮昏」を意味し、紂王のいる夷の場所で「蛮夷昏の君」の称として使用されていると張氏は解している。

『国語』（鄭語）には「而近頑童窮固」に「童昏固陋」と注があり、一説には「夷童」は「夷東」と読み、「東夷」を示すと考えられる¹²。

6 例えば(表1)中で見ると、孟得簋 (No.4444)、伯簋 (No.4545)、晉侯簋甲乙 (No.4736、No.4737)、叔疆父簋 (No.5003)、邢南伯簋 (No.5103)、豨簋 (No.5180)、霸伯簋 (No.5220)、即簋 (No.5290)、師虎簋 (No.5371)、詢簋 (No.5378)、乖伯簋 (No.5385) など。

7 許慎撰『説文解字』中華書局出版(1963、12)58頁、「童」字参照。

8 毛公鼎(西周時代後期)においては、「童」の字形を「動」の字義として用い、「死として余一人の位に在るを動ぜしむる母かれ」(『甲骨文・金文』殷・周・列国[二玄社]128-129頁)と表記され、動揺・動静の意として用いる。

9 前掲『説文解字』292頁、「動」字参照。

10 白川静著『字統』株式会社平凡社(1994、3)655頁。「動」字の説明箇所を参照。

11 張亞初著『商周古文字源流疏證』中華書局(2014、9)1285-1286頁。張氏の検証では、史牆盤を西周時代中期と比定し、「童」字を解釈している。

12 前掲『商周古文字源流疏證』1287-1288頁。

このように「童」字は、銘文の内容から様々な使用法が認められるが、字形に関する解釈は皆無であるため、次に殳簋銘文の「童」字形について検証を行う。

『説文解字』では前述のように、字義に関する内容のみで、字形に関する解釈がない。(図2)は鎛などにより字形を確認し難い部分もあるため、(図3)のように「童」字の模写を、稿者が試みた。

(図3)



これを基にこの「童」の字形を詳細に観察すると、「辛」形・「目」形・「口」形・「東」形による字形とも想定できる。

これは、基本的な「童」形に依拠する考察である。ただ「辛」形の縦画が、「目」形と「口」形を貫通していると解釈し、目に刑罰の意味と青銅器（口形）に呪詛の意味を加えていると考え、さらに「東」（東）形を加えることで、受刑者を意味する「童」の受刑の程度が大変重いということを暗に示している構成であろうか。

「童」形中の「目」形は眼中に瞳（●で記した点）も表記したものが一般的に知られるが、この殳簋銘文ではそれが見られない。「目」形として表記しているのか疑問も残る。「目」部に関しては、史牆盤の「童」字形に類似する表記法と考えられる。

銘文内容より「童」（動）字を「作す」と解釈できるが、現存する青銅器銘文では「童」字を「作す」と解釈する例は未だ見られない。もし、この殳簋銘文の「童」字形がその初見の例であるとしたら、他と違うところは「口」形が見られる点である。「口」形は祭祀儀礼に使用される青銅器を意味し、これを使用する字形は必ず何かしらの祭祀儀礼が為されている状態が表現されている。

このことから「童」形に「口」形が伴うと、受刑者が祭祀儀礼に関わり何かを為す、つまり「なす」という字義が強くなると考えられないだろうか。

結 言

本論では、殳簋銘文内容と銘文中の文字について一検証を主として行った。本器は、個人蔵であるため、金文関連の書籍等には一切掲載されていない。そのためこの器を製作した「殳」という人物も初出である。この「殳」字の字形・字義についても、今後の研究課題としたい。

しかしながら、殳簋における「童」（動）形の用法について、今まで実例をみない『説文解字』に記載される字義（「作す」という意）と一致することが確認でき、そしてこの使用例を初めて見出したことは、本研究の大きな成果であろう。

漢時代以降の石碑や簡牘などではよく「童」「動」の事例を確認できるが、西周時代金文において、「童」（動）字の事例が少ない中、この研究は大きな意義をもつと考える。

殳簋銘文全体は、図版から解るように、縦横がある程度整齐と並び、西周時代中期の様相を呈している。字形は縦長で肥筆も確認できるため、西周時代前期の特徴も見出せる。しかし銘文中の「父丁」部は、西周前期であれば合文で表記されるところが一文字ずつの表記になっており、この部分は西周時代中期特有の表記である。

器形や銘文表記の状況を再確認すると、この殳簋は、器形の特徴から推定するに西周時代中期から後期にかけて移行するその過渡期前と考えられる。また銘文表記に関しては、前期的特徴も見られ中期的表記も看取できると言えよう。

このように考えると、殳簋は時代的な幅が広く、その時代設定が難しいように思われる。しかし、文字表

記に関しては地域性が考えられるため、彥簋はおおかた西周時代中期のものと比定できると考察する。

今後、文字の地域性に主眼を置き研究を進めるが、その鍵となるのは銘文末にある氏族銘であろうか。図版より、彥簋銘文末には氏族銘が二種類確認できる。ひとつは「晋」形に鉤形が付随した象形のもの、ふたつ目は「亞」形のものである。鉤形の氏族銘は、師呂鼎・姑氏簋・且丁爵・歩冫添父癸爵・伯姫簋・弔角父簋・弔侯父簋・保子達簋などに見られる¹³が、「晋」形と組合わせて表記した氏族銘は、現段階では確認できない。この点に関する究明と「亞」形を同時に表記する意味合いについても、今後の課題である。

13 何景成著『商周青銅器族氏銘文研究』齊魯書社（2009. 1）457-458頁。

Course of Principal Human Sciences, Depart of Human

Masahiko KOKI

Development, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

About “珍籛” where ancient letters carved in metal-related books do not have the publication at all now, I performed a study. In that, I inspected it about a “童” of inscriptions character.

About this “童” character, I supposed that it was a “動” character and the same character justice, the use in “説文解字” and performed a preliminary essay while finding specialty for the print constitution.

As a result, the “童（動）” of “珍籛” inscriptions character, it is used in the meaning of the word “making a product”. Besides, I concluded it as an example of the first interview in bronze ware inscriptions.

In Xi Zhou period ancient letters carved in metal, it has few examples of the “童（動）” character. I think this study to have big significance.